

横浜歌人会 会報

122*

横浜歌人会会報 第122号

目次

- 特集1 インタビュー 間村俊一さん
 - * 02 語る指さき—間村俊一の仕事場 聞き手・構成・高橋みずほ
 - * 07 俳句 BANSYU … 間村俊一

- 特集2 「うたの地図 Yokohama」を読む
 - * 08 多様な魅力 … 佐波洋子
 - * 10 様々な横浜の景色 … 桜井健司
 - * 12 ハマの魅力 … 真鍋正男
 - * 14 海の横浜、山の横浜 … 大橋 弘
 - * 16 最南端の旅 … 大久保春乃
 - * 18 楽しい旅 … 山本登志枝
 - * 20 ここに「よこはま」の風景が、ある … 荻谷君代
 - * 22 地図というアンソロジー … 吉野裕之

 - * 24 編集後記

語る指さき—間村俊一の仕事場

聞き手・構成・高橋みずほ

指さきを、透明な細長い定規の縁に平行に揃える。上から押さえるというよりも添わせるように置く。手がすつと伸びてきて、定規にそって線を引く。メモリに印をつけてゆく。瞬時のことのように、長い時が流れているようだった。左右から照らす丸い電球の光の中で、おもむろに左手が白い物を取ると、そのカバールの文字を見ながら定規をあてがい測ってゆき、机の上の本のカバーの大きさの長い紙に印をつけてゆく。

間村…こうやって、デザインを決めてゆく。こういう真っ白なものを、東見本というのですけれど。本の大きさに合わせてページ数が決まった段階で、出版社が作ってくれるわけ、必ず。これをもらって、僕の場合は、こう紙巻いてその上に、文字のコピーを切り貼りしておいて、デザインを段々決めてゆくわけ。出版社によってね、東見本を作らないところもあるけど基本的には必ずその本に合わせて、東見本を作ってくれます。使う紙によって、ほら、厚さが違ってくるでしょ。

立体の東見本から平面のカバーの紙へ、文字の位置を写し取ってゆく。紙をまわし、東見本の厚さを手にして定規で測り、手の触覚に納めてゆく。忙しく手が動く。東見本の文字、図柄などを平面の紙に落してゆ

く作業を繰り返す手は、掴む紙がふわつと動くように、手も指も軽やかに動く。動くというより、舞う。

*

目の前の東見本の山積みの上に乗せてあるやりかけの装訂の紙を取る。部屋にあるコピー機へ行き、コピーをする。また戻り、光の中に顔を沈めるようにして文字を切り取ってゆく。カッターの刃の動きは息づきのようで、沈黙は刃の鋭い動きになる。

光の中に立ち上がり、文字の位置を決めてゆく。

間村…明朝体は長い歴史の中で残ってきた書体だし、まあ、ゴシックもそうなんだろうけど、でも明朝の方が古いでしょうね。僕は、基本的に明朝が好きだから、どうしても明朝を使うことが多い。ときどき内容に合えば、ゴシックでというときもあるんだけどね。

文字の間隔をじつと見る。また少しずらして、位置を決める。切り取った文字に、大きな茶色の瓶の蓋の上から刺し通したような刷毛で中の糊を取り、塗る。時計の秒針の動く音……。

間村…これは特殊な、剥がせる糊。微調整ができるんだ……、空間が、大事なんだ。

今どき、こんなことやってデザインを決める人、いないんだよ。みんな、コンピューターだから、カッターや定規なんか使わない。そうそう、バーコードが邪魔だという人が多いけど、そういうことない。僕ね、バーコード好きなんだよ。どこか機能的でしょ。二べも無いところがいいんだよ。

カッターの刃を伸ばす音、バーコードを切り取る。バーコードに糊をつける。剥がしては、また貼る。ほんの少しの間をずらす指さきが導くように、眼が従っているような、眼がさきに……、不思議な間がある。

間村…仕事はね、一冊だけをしているわけではないから。複数やってる。今だって、三冊ぐらい同時平行。あ、仕事は断らないですよ、僕は。受注産業だから、来たものは受けますよ。

こういうダメー撮っていったらどう、俺の変な写真使うより(笑)。最近の編集者なんか、著者に送るって、みんな携帯で撮っていく。これはもう出版された本だから、写真を撮っても大丈夫だよ。



手を動かしながら、話をすることを厭わない。言葉が途切れても、手が話をするように動いてゆくから、静かに時が流れても沈黙の息詰りが無い。手が話し続ける。

間村…本には、宇宙が封印されている、世界のすべてを内包しているって、ボルヘスからの引用。本という

のは一冊で完結しているわけだから、一冊のなかにすべてのものが閉じ込められているっていうイメージが楽しいんだよ。カッコつけてるだけだけど(笑)。

装訂のどういふところが楽しいかって、漠然といわれたって、それは本が成立するから楽しいんじゃないの。漠然と返すけど(笑)。それ以上いいようがないじゃないの(笑)。

電球の光も時をじつと照らし出す。机のまわりは白い山に囲まれているように、終わった東見本が無造作に積み重ねられている。

*

—ふる里のお話をお聞かせください。

兵庫県の宍粟郡しそという、山の中ですよ、小さな町で育ったんですよ。山崎町。今は合併して宍粟市になっています。山崎は京都の山崎やまざきと同じ漢字を書くけど「やまさき」と濁らないんですよ。たつの市(二〇〇五年龍野市他三市が合併)に近いのかな。高校は龍野高校、旧制で割と古い歴史のある学校で、バスで片道三十分くらいかな。学生時代は知らなかったけれど、あとで俳句の赤尾兜子さんが、お出になつたようなことも聞きました。

スポーツはまったく得意でなかったけれど、本は好きだった。短歌や詩よりむしろ小説、三島由紀夫、大江健三郎、安部公房とか、あの頃の流行だった。

山の中の町だったから、山にはよく登りましたよ。山といっても大層な山でなくて、子供でも一時間もあれば登ったりできる、そういう小さな山です。雪国でもないし。雪降らないよ。瀬戸内、あの辺は降らないんだよ、四国でだいたい止まる、台風も来ないし。小

さい盆地だからね。とにかくまわりが全部山。その中で育っているから、山がないと不安になるよ。田舎から出たのが大学のときだから、大学も京都でしょう、京都も盆地で当然うちの町より大きいけど、京都もやっぱりぐるり山ね、それは落ち着くよ。京都から東京に出てきて、東京って山ないから、あれーと思っちゃうよね。なんかこう、閉鎖されたところで育っているから山がないってことは、居心地がちよつとね。遮るものがないと、ちよつとどうしていいかわからないようになるよね。まあもう、東京の方が長くなったから、こっちに慣れちゃつたけれどね。

今は台東区根岸に住んでいる、ときどき横浜の根岸と間違えられるんだよ。横浜行くことももちろんあるけど、行つたら飲むことになるでしょ。帰ってくるのがいやなんだよなあ。中華街なんかいいんだけど、酒飲んで、電車に乗るのが嫌なんだよね。

—絵を描き始めたのはいつ頃からですか。

小さい頃は漫画少年だった。月刊誌とかを取って、真似して描いていた。同志社大学の文学部に入ってからだよ。絵の専門ではないけれど、芝居のサークルに入つて、ポスターなんか作るのにちよつと描いてみたのね、それからですよ。面白くなつて。

塚本青史さんたち同志社の先輩たちと知り合つて、同人誌「ぬまあごを」に入れてもらった。僕は途中から参加したから、一番年下だった。それは「形象」という意味だったかな。詩とか小説とか書いていた人もいたんだけど、僕はペン画を描いていました。

芝居では主に演出を担当していたんだけど、脚本を誰かが書かなければならなくて、一度だけ苦し紛れに書いたら大失敗したんだ。苦い思い出です。



—大学卒業後、どのような道を歩まれたのですか。
大学を卒業して、二年間だけ会社に勤めました。就

職で関西から東京に出てきて、最初にアパート借りたのが西尾久。一年ぐらい経って、仙台に支社ができて十二月に転動になったんだよ。

仙台の住所は忘れたけど、用意されていたアパートは、駅からバスで十分〜十五分だったかな。東北大学のキャンパスに近かったよ。ちよつと小高い、小山のようなところにあつて。雉が出たもん。野生の雉が、そのアパートのところの茂みに（笑）。なんだろうと思つたら、あ、雉じゃん（笑）。すごい木造のアパートだった。僕が選んだわけじゃなくて、支社の先輩が探してくれた。いわれるままに入つたら、なんか、鉛筆とかが転がるんだよ、テーブル上で（笑）。これはあれだ、震災（宮城県沖地震）のときにちよつと、傾いたんだよ、たぶん。

関西からゆくと……、東北は初めてだったから、それなりに面白かったですよ。役所の仕事していたからね、刊行物を出す。市役所とか、町役場とかのね。仙台を拠点にしてあつちこち行つた。石巻とか、気仙沼とか、女川。一泊することもあつて、なかなかよかったですよ。でも、寒かったですよ、行つたのが十二月でしょ。仙台は雪降らないとか聞いてたのに、行つたら大雪でね。珍しかったんですよ。すつこい積つて、着いた日に。それでめげました（笑）。

大通りにあつた屋台は面白かったですね。いま屋台なんてないでしょ、何件か屋台あつたんですよ。まだ、新幹線の通る前。歓迎会も屋台でした。おでんがおいしかったなあ。僕が辞めてしばらく経つてからだよ。新幹線通つたのは、二十六、七歳でしょう。四十年前だよ。そうなんだよなあ。

—その後、装訂のお仕事に就かれたのですか。
そんなことない。サラリーマンを二年ぐらいやって

辞めたときに、絵を描いていたんだよ、その頃まではペン画。大学の後輩たちがやってた芝居のポスターなんか。それで恐れ多くも絵の仕事でもしようかなと思つて辞めたんだ。何の当てもなく。ところが、さすがに辞めてみて、絵の仕事といつたつて、自由に描く分にはいいけど、職業にするには、ほら、いわれたものを描かなければいけないということに気がついた。そこは無理だなと思つた。そこまで絵の勉強してたわけじゃないから。好きで描いていただけだから、ね。よし、それなら装訂でいこう、という訳もわからない無謀な結論に達したというわけ（笑）。

—鉛筆画の画集を出されていますね。

「宮沢賢治」という雑誌を、年に一回出す出版社（洋々社）で仕事を受けて、それから宮沢賢治を読むようになって。その頃は装訂を始めたばかりで、時間もいっぱいあつたから。じゃあ、イラスト描こうかという話になって、それで賢治のイラストを鉛筆画で描いて、それから画集『ジヨバンニ』（洋々社、一九九八年）を作った。

宮沢賢治学会というのがあつて、歌人の佐藤通雅さんがその理事をされていて、岩手県花巻の宮沢賢治イーハトーブ館で作品展（間村俊一展「鉛筆のジヨバンニ」）をやりませんかという、嬉しい依頼、佐藤さんの本も何冊か装訂していたというご縁だったのかな。二ヶ月ぐらいやってくれたの。ちよつと夏休みの頃だった。楽しかったなあ、みんな来てくれて。玄関入つてすぐのところポスター貼つてあるから……、二〇〇七年、そんな前か、そんななるんだ。

あるとき、洋々社の梅田鉄夫さんから「宮沢賢治」の雑誌に、誰かにエッセイを頼んでくださいといわれて、福島泰樹さんの原稿をもらいに行つたんだよ。吉

祥寺の「曼荼羅」へウイスキー一本提げていった。大
学時代から福島さんの短歌を読んでいたからね。「テ
クノボーと呼ばれようとも」という直筆の原稿をいた
だいた。それが福島さんとの長いお付き合いの始めで
す。宮沢賢治のおかげかな。

—装訂で心がけていらつしやることを教えて
ください。

本というのは、あまりごちゃごちゃしない方がいい
と思う。やり過ぎてもしけないし、何と何のかタイ
トルと、こういった画像があるわけだから、何でもか
んでも詰め込み過ぎると、ね、あまりよくないから。
極力余分なものは捨てていって、必要なものが残った
ところで完成するようにしないと。俳句もそうなのか
な。短歌は七七があるけど、俳句は五七五だけだから
ね。その中に焦点が二つあるのはよくない。それと同
じで装訂も、例えばまあ、ケースバイケースだけど、
写真二点はあまり使わない方がいいんだよね、極力一
点に絞って。意図的に二点使う場合もあるけれど、複
数の画像が載っているとその分、散漫になるでしょ。
だから極力そういう余分なものは切り捨てて、シンプ
ルというか、ぎりぎり残ったもので構成する方がいい
と思いますよ。

句集にしる、歌集にしる、詩集もそうだけれど、文
学系のテキストはちよつと読まない方向性がわから
ない。でも人文系のものはね、専門的などころまでは
読めないでしょう、心理学とか、哲学とかね、分量も
多いし、ゲラもらっても読めないですよ。そのとき
は編集者のお話を聞いたりして、どのように作りたい
のかご希望を聞きます。材料があつたら、こういう線
でいこうかと、編集者との打合せで決まる。でも句集
とか歌集とかは読まないとほら、その方向性がわから

ないから、目は全部通すようにしてますよ。エッセイ
とか小説も、僕は小説は多くないけれども、ただあま
り読み過ぎても、ちよつと困るんですよ。内容を讀
み込み過ぎるとそこに捉われるから、あまり入り込む
と今度くどくなる。ほどよい距離でテキストと付き合
わないと、ベタツとゆくのほね。距離感っていうかな、
テキストとのほどよい距離感で装訂に入らないと。
のめり込み過ぎると、絵解きになつて面白くないで
しょ。即かず離れずみたいなのがいい。全部理解でき
るわけじゃないから。どんな短歌だつて、俳句だつて、
全部は理解できないじゃない。それはそれで空気感と
いうか、そういうのがわかれば、装訂とシンクロする。
理解できたからいい装訂になるとは限らない。そうい
う頃は、それはもう、説明できないよね。

題名は大きいよね、タイトルがきつちり見えないと
いやだから、あまり文字をいじつたり、文字自体を加
工することもしないし、極力、タイトルがはっきり見
えるように考えますよね。タイトルからイメージする
こともあるからね。どんなジャンルの本でもタイトルの
持つ意味は大きいから、漢字とカナの並びだとか、
その長さ短さなんかも考えます。やっぱりタイトルが
大事です。あまり無理してへんにいじらない、そうい
う風に気を付けていますね。

—なぜ、俳句を始められたのですか。

そうだね、塚本青史さんと知り合つて、お父さんの
本を讀んでみようと思つて讀み始めたのがきっかけか
な。当時芝居に夢中だつたから、寺山修司はよく讀ん
でましたね。寺山さんとか塚本さんの短詩型に関する
本を讀み始めてから意識的に作るようになったよね。
あくまでちよこちよこですよ。一年に数句とか。サー
クルとか結社に入つてはいないから。

俳句の方が好きだつたね。短歌はね、作つてみよう
と思つてみたけど結局作れなかつた。やっぱり合わない
んだ。長いんだよ(笑)。両方作る人いるけど、無
理だつたよね。俳句が合つたのでしようね。それで
も五七五で俳句を作つといて、無理やり七七をつけて



(笑)。なんか格好だけつけてるようなのが(笑)、たまあにできる。年賀状とかは俳句に短歌を一首つけて、俳句の詞書にする。逆の人はよくいるじゃないですか、岡井隆さんは俳句をつけて短歌を作るでしょ。これ面白いなと思って、ときどきね、試みるんですけど、なかなか難しい……。

— 間村さんの俳句・言葉についてお聞かせください。

僕の俳句は、妄想俳句だから(笑)。写実とか、写生の句は作れない。妄想句。塚本さんの『百句燦燦』(講談社、一九七四年)とかを読んで、俳句を作り始めたから、基本的に絵空事。吟行なんてとんでもないよね。その場で作れなんてできるわけじゃない。一回しようことなしに、吟行に連れて行かれて、前の日に全部作っちゃったもんね(笑)。吟行するふりをして、出したら、夜の句作って(笑)。吟行のじゃないっていわれたことあったけどね。その場でなんてできやしないよ。俺なんか、夜中だからね、作るの(笑)。それでしかもいじり倒して、こねくりまわして。ま、さすがに句会は慣れたけど、句会は用意して行けるから。席題は絶対無理。準備できないから(笑)。

俳句の魅力？ 短いから？ またボルヘスかな。うーん、わからないなあ。まあ、好きだったんでしょ。俳句を作るときは、まず言葉が先に出てくるよね、最初から。何かを見てからじゃないんだ。湧くほどできないけどね、もちろん。結局、よくわかりません。

俳句を作るときは、指を折る、そりやそうですよ(笑)。折るよ、だって特に句まがりのときなんか、ほらね、十二音になったりとか、こうやって数えない



と。しょっちゅうですよ。僕は旧字、旧かなです。繰り返しの「トク」とか、「ズ」とか使うのは、あれはね、加藤郁平さんの影響。郁平さんの影響が大きいです。好きだったから。真似ばかりさせてもらいました。晩年、お会いすることができて、句集も何冊か装訂をさせていただいて。ありがたいことでした。

天上の瀧見しことや鶴の鬱

これも妄想に決まっている(笑)。天上に瀧があるわけではないじゃない、鶴が見るんだもの、そんな瀧ある

わけではない、実在するわけじゃない。鶴が空を飛んでいて、天上にある瀧を見ちゃったから、それで精神がおかしくなつて鶴が鬱になったという俳句なんだけど、ほんとかしら(笑)。『鶴の鬱』(角川書店、二〇〇七年)全部、そうですよ。見たもの作つたって、面白くないじゃない(笑)。作つた句は百句くらいしかなかったんだよ、そのときは。だから句集は、一頁一句になつたんだ。活版印刷のおかけでなんとかなつた。

それに本文にはり・シマメという、普通カバーなんかを使う紙を使わせてもらった。そりや装訂を仕事にしているし、自分の本だからね。それぐらいのことはしますよ、完璧じゃないけどね。本は切りがありません。もう一冊くらいは作らないとあととは思っています。妄想句の(笑)。第二句集『抜辨天』(KADOKAWA、二〇一四年)も活版。これまでは活版でやれたけど、さすがに第三句集は無理だろうね。残念だけど。

*

間村の仕事場兼事務所は神楽坂、三角の敷地に立ち、山猫軒の表札がある。二階へ階段を上がって、玄関のドアを開けると、正面の壁に、宮沢賢治イーハトーブ館で開催された作品展の大きなポスターが貼られている。そして仕事部屋にはもう一枚、今道子撮影になる種村季弘の白黒写真のポスター(※)を貼っている。間村はこの展覧会図録や、『泉鏡花集成』(筑摩書房、一九九五〜九七年)など種村の多くの著書の装訂を手掛けている。

種村は画集『シヨバンニ』の扉に、間村へ真っ直ぐに言葉を投げかける。

原作がメルヘンのイラストレーションというの

BANSYU

間村俊一

來し方は

來歴を問はゞ播州みなし栗

あの少年

鬼灯やタイタニック號乗船名簿

眞鶴に種村季弘さんを訪ふ

干されたるヤガラの方も秋に入る

傘屋のグンちゃん

アーケード街暗し數多の猪し吊られ

まみえしは池内紀唐突になんやあんたも播州かいな

秋めくや三鷹にわれを待つゴーレム

繪が得意だった

城趾の小学校や山眠る

おでんとは言はず

さしぐみて關東炊きはふくろかな

戦争や金田正一軍靴冬

蕪蒸しシベリアのこと母のこと

片時雨もつれづれで掛保の糸

間村電氣商會父や注連飾る

面接も濟みて姫路の路地裏に議員秘書なる従兄弟とふたり

七輪にホルモン焼けばはだれ雪

加古川の印刷會社に就職は決まりをりしが山櫻憂し

すかんぼやよし東京に行つて來ひ

橋桁の下に初蝶生るゝかな金襴緞子の帯はかなしも

坂東の男さても蝶狂ひ

朴の花末つ子千代子は母なるぞ

備前美作みまさかより揚羽出奔す

きのゝ晩猪出てな西瓜みな喰はれてしもてさつぱりわやゝ

茱萸の家長姉やひとりながらへて

は、(略)原作に細部の散文的指定がないだけに、
ともすれば描きすぎになつてしまふようです。空
のお皿みたいに細部がほとんど盛られていないメ
ルヘンという容器は、それだけに情念が空白を満
たす格好の舞台になるからなのでしょう。

御作でも情念の渦が突風のように舞い、空間は
それを受けて破れたり、突然の気孔をうがれたた
りして、バラバラに飛び散つて行きます。風の又
三郎を飛ばしている情念装置ですね。(略)

それはそれでいいのですが、問題が造形という
ことになる、たぶんそこから先があるでしょ
う。(略)御作ではむしろコラージュ連作のある
ものがそれに成功しているようです。

コピー機の置かれた一角。大漁の魚、鶏の足などが
刺さつた帽子をかぶり、丸い眼鏡をかけ、射貫くよう
な一瞬を撮つた、種村の顔がある。

日に何度となく文字や図柄をコピーし、切り取る作
業を繰り返す間村。その右側面の壁にそれがある。種
村の顔は、コピーを取りにくるまさにその間村を見据
える位置にある。この眼差しを受け取ることをみずか
らに課するように、間村はコピーを取り続ける。

間村には、言葉の端々にある沈黙、声の余韻にみず
から耳を傾ける姿がある。デザインの中の空間は、
真つ直ぐに來るものを一つ一つ受け止めながら育てて
きた、間村の世界なのではないか。

指さきの動き、線をひく鉛筆の音、貼り付ける呼吸、
時計の刻み……、その線と沈黙の空間から、間村の世
界が聴こえてくる。

※二〇一四年に板橋区立美術館で開催された「種村季
弘の眼 迷宮の美術家たち」のもの。

多様な魅力◎佐波洋子

私の担当は中区と西区。面白い企画と思った。横浜に住んで十六年程になるが、歌に当たると分からねぬ所も多く「うたの地図」との位置関係や歴史を逍遙させられつつ、横浜の面白さを再確認した。

かなしみに夢とどこほる月のみちベイブリッジの
弦を撫でつつ 鳴海 宥

中区本牧埠頭と鶴見区大黒埠頭を結ぶベイブリッジは、一九八九年に開通し、かつて歩行者専用の展望道路があったが二〇一〇年に閉鎖。一時期無料開放したが、現在は今年の秋頃まで工事のため閉鎖している。

この歌は閉鎖前に詠まれたものか。作者が橋のケールに触れながら月光の差すスカイウォークを歩いたと解した。「弦」と表現した事で楽器に触れているイメージが立ち上がる。そこからは淋しい音色が聞こえてきそうだ。作者も一つの景の中に映像として映る。歩行者用道路が閉鎖後だとすると、月が主語という

空想的な解釈も出来る。月の出ているベイブリッジの夜景は幻想的で美しい。月が橋のケールを楽器のように触れて過ぎる錯覚も生み、一首は月と作者がいつしか渾然として、ひんやりと美しい空気を醸し出す。

漁港なりし基地ありし横浜の湊の夜景のために降

車す 間 ルリ

「横浜の湊」はやや漠然としているが、本牧埠頭だろうか。本牧は横浜大空襲で壊滅的な被害を受け、敗戦後は米軍の管理下に置かれ、軍人・軍属・その家族らの居住地として昭和五七年まで接收は続く。以後、返還後の現代の本牧の変貌は著しく、一九六〇年代から埠頭の突堤が順次建設、整備され、コンテナターミナルとしての変貌は、近年も更に続いている。突堤にはシンボルタワー・海釣り施設・本牧漁港もあり、倉庫群やガントリークレーン等独特の夜景であろう。

その夜景を見るために降車した作者の関心は、夜景の具体にはないようだ。「夜景のために」と敢えて言う所に素っ気ないが意図を感じる。自分の行為に多少の後ろめたさがあったかどうか。むしろ、基地だった事実と流れた時間を見届ける意識が言わせたと感じる。

閉館の近代文学館を出てはじめてきづく秋の星星
松平盟子

一首は平易な表現だが、句割れの屈折した文体が単なる「秋の星星」の発見ではないと暗示する。「近代文学館」と「星星」から「明星」に連想が及ぶ。作者が二〇〇七年に結成した「明星研究会」の継続的な活

動からもごく自然な連想だろう。鉄幹、晶子をめぐる短歌史の変動など読者の想像は広く分厚く拡がる。そして最後に澄んだ秋の星星に目は移る。

神奈川近代文学館は「港の見える丘公園」の一画にある。公園から文学館に通じる橋(?)からも港が一望でき、帰りには港の上の月と出会う事もある。

文学館の閉館時間は、展示室は十七時、閲覧室は十八時半。日暮れの早い秋の星星はこの橋から見ただろうか。遙かな星の瞬きによって文学館の展示の世界と現実が交差するような余韻を残す。

船体のめぐりを灯しシーバスはさながら光る虫の
ごと進む 小南紀子

俯瞰した横浜港のシーバスに焦点が当てられている。シーバスは上から見ると平べったい形だから、虫のように見えたのもリアルだ。船体の縁取りのような灯りが点くのは暗くなつてからであろう。船の形がくきやかに見え、光る虫が暗い水面を音もなく進んでいく光景が浮かぶ。

作者はホテルから夜の港を俯瞰、との左注がある。映画のシーンのようだが、ロマンチックな気分よりむしろ楽しさが感じられる。シーバスの発見と、比喩の力でバターン化しない場面を表出した。

シーバスは、横浜東口からみなどみらい、赤レンガ倉庫、山下公園を結ぶ海上バスだが、帷子川河口の淡水と海水域を往き来しているので魚のスズキの意とか。そんな語源の発見もあった。

横浜に住むとは思はなかつたな懐かしの「ブルー
ライトヨコハマ」 中川宏子

上の句の口調に実感がある。口語の効果もあり、上の句には思わずクスツと笑わせられた。それは後悔を

してるとか、嫌だと思っっているのではなく、むしろ横浜が好きだから出た言葉だと思っ。どこかユーモラスだ。「懐かしの」は個人の思い出でなく時代的な単なるレトロ感とも取れる。あの「ブルーライトヨコハマ」の「横浜」に住むようになったという懐れか不思議な巡り合わせのような感慨であろう。

いしだあゆみが歌って一九六八年一二月に発売、たちまち大ヒット。幸せなラヴソングだが、何故か私はずっとアンニュイな歌だと思っっていた。この時代、七十年安保闘争やベトナム反戦運動等で、学生運動が過激さを増していった事が反映していたかもしれない。

バベルの塔ならねば明るく灯をともしランドマークタワー神を懼れず 朝井恭子

バベルの塔は、天にも届く塔を造ろうとして神の怒りに触れて崩れてしまったという旧約聖書の「創世記」に登場する話として知られるが、そのバベルの塔ではないから神の罰を懼れることもなくランドマークタワーは高々と灯りをともして聳えているのだ。だが、いつか神の怒りに触れるのではと作者は危ぶむ。「懼れず」は「懼れる」の裏返しだ。

横浜ランドマークタワーの所在地は西区みなとみらい。七十三階296mの高さを誇る大型複合施設である。山下公園は中区。マリントワーがある。こちらは高さ106mとか。横浜開港一〇〇周年の記念に建設され、これも横浜のシンボルになっている。因みにスカイツリーは634mとか。電波塔の先端が突き刺す天を見ると作者ならずも不安だ。

みなとみらいに日本丸が帆を張りぬはるかとはよくより来しものごとく 小島熱子

帆船日本丸は航海練習帆船で一九三〇年、神戸市の川崎造船所で進水。その姿の美しさから「太平洋の白鳥」「海の貴婦人」等と呼ばれた。約半世紀にわたり活躍し、一九八四年に引退。初代帆船日本丸は西区の横浜みなとみらい地区で保存、公開されている。年間約十二回の総帆展帆があり、手作業で行うらしい。帆を張ってなくても繊細なマストはロマンがあり美しい。作者は帆を張った日本丸を見て、はるかな航海から今戻ったように眩しい感動を受けている。「はるかとはく」は距離だけでなく時間も含みどこか切ない。帆装艤装が外された戦中の石炭等の運搬、戦後の引揚者の輸送や遺骨収集の任を務めた日本丸の負う時間を平仮名表記が濾過させたように光る。

江戸後期横濱村はたつた一〇〇戸 人より多くか 鹿取未放

横濱は幕末まで数百戸の半農半漁の村だったが、幕末期の開港により都市機能の基盤が作られて行き、明治を迎えるまで国内最大の貿易港に発展していったようだ。この歌はその途上の頃に思いを馳せているのだろう。「人より多くかめが舞つ」た光景を懐かしんでいるように見える。旧字の「横濱村」がいかにもそれらしい風景を偲ばせ、かもめの舞う姿をリアルにさせる。読者は時空間を超えた横濱村へと誘われる。

ところで作者が佇む本町通りとはどの辺か。桜木町一丁目から本町五丁目交差点を経て、関内の街を横断し、元町方面まで続く通りで、本町通りは、旧州干島の地に新設された本町を貫く目抜き通りだとか。方向音痴の筆者は混乱するが、いつか足跡を辿ってみたい。

ウイルスも種の存続にかけてぬむ萌黄の風を肺ふかく吸ふ 田代弥生

萌黄色は冴えた黄緑色で春の若木の色。日本大通の街路樹は何か思い出せないが、春には若葉が出て、そこを抜ける風は萌黄の色と香りを纏っていたのだと思像する。コロナの流行によるマスクに疲れ、自粛に疲れた作者は、その風を思い切り深く吸ったのだろう。「萌黄の風」はきれいな表現で、春の若木の香りとして命の再生を実感させる。それゆえに上の句の発想が生きてくる。よく言われる事ではあるが、生物としては種の存続のために生きる点ではみな同じだ。ウイルスの活動自体仕方ないと捉えつつ、嘆息してようだ。「肺ふかく」は、肺を脅かすコロナに対する言葉として選ばれている。コロナウイルスが消えてもまた別のウイルスが生まれる。そんな時、生命力溢れる萌黄の風を吸ってみようと思う。

指路教会前を通りて馬車道の相生会館へクラス会に行く 伊藤美枝

クラス会へ行く道順があるままに書かれていて、固有名詞が存在を示す。テンポの良い文体に作者の弾んだ歩調まで見えるようだ。指路教会も相生会館も均等な重さで表現されているのは、作者にとつては馴染みある風景なのだろう。クラス会も想像出来る。

バラ窓のある重厚な指路教会はヘボン博士を中心に設立。宣教医のヘボン博士は日本初の和英辞書を編纂。ヘボン式ローマ字はその辞書の表記が元になった。また、生麦事件で負傷したイギリス人の治療も行う等親しまれたが教会完成後、惜しまれつつ日本を去る。

さて、相生会館は一九三二年（昭和六）創業の老舗レストランで馬車道が本店。二〇一五年二月にこちらも惜しまれつつ閉店したとか。クラス会はその前だったのだろう。間に合っって良かった。

様々な横浜の景色◎桜井健司

たまご色のランプシェードに映りては消ゆ来し方
のおもおのもの 大久保春乃

場所は、常盤町の馬車道十番館。横浜をイメージする上で相応しい場所。薄暗く重厚な館内の様子が目に浮かぶ。ランプシェードの色は、落ち着いた「たまご色」。洋館にとても似合う色と思う。そこに映る「おのおのもの」とは、横浜十番館に集った幾人もの姿のことだろう。ランプシェードに映っては消え去って行く人々の姿。

しかし、それだけではない。視覚的、物理的に映った実際の人達の姿の他に、その人達の抱えている「来し方」、即ちその人達の今までの時間の蓄積も同時に詠まれていると考えたい。更にそこには、横浜という土地の積み重ねてきた歴史も重ねられているのではないか。横浜のハイカラなイメージの中で人の時間を描き出し、実景をポエティックに昇華した一首。

ちちははとホテルの窓に眺めたる花火、満月、運
河の小舟 鯨井可菜子

幼少の頃だろう、両親とホテルに滞在し、窓から景色を眺めた記憶を詠んだ歌。花火大会という格別な日に、両親と共に滞在した懐かしい思い出の一コマである。三つの景にスポットライトを当て、それをひとつ

の定型というフレームに収めて描写した景は、あたたかも一枚の絵画のようだ。歓声を上げている家族の表情も目に浮かぶ。「うたの地図」の上では、上空に花火が打ち上げられている様子、満月の美しさ、運河に小舟が浮かんでいる景色それぞれ様子を、文字の色彩の変化によってバリエーションを持たせて視覚的、立体的に表現している。

みなとみらいの夜の景色と、家族が集った懐かしい記憶をオーバーラップさせたこの作品は、作者にとつての横浜の原風景が描かれているのかもしれない。

シタールのびいんと聴こゆ半開きの野毛の小路の
扉の闇より 長野道子

シタールはインド発祥の弦楽器。まさに「びいん」と鳴る。野毛の町を歩いていると、半開きの門の奥より、シタールの独特の音色が聞こえてきた。野毛は横浜の中でも個性的なエネルギーを感じさせるユニークな町であり、その小路の奥からアジアテイストな音楽が聞こえてくるとは、何とも気になるところである。サークルか何かの演奏会が開催されていたのだろうか、あるいは一人で練習していたか。そこにはあえて触れられていないため、ミステリアス。

「うたの地図」上では、「小路の扉の闇より」が黒

い文字で表記されており、視覚的に闇をイメージさせている。エキゾチックな都市、横浜の街の不思議な魅力と磁力が、作品と共に浮かび上がってくる一首だ。

風に乗り動物園より聞こえる咆哮は寂しいさび
しいと言う 深志聖子

野毛山動物園だろう。聞こえてくる動物たちの鳴き声、咆哮。ジャングルやサバンナを懐かしんでいるのだろうか。「寂しいさびしい」と、同じ語を異なった表記にしたことで、単数には留まらない動物たちのいくつもの寂しさが表現されている。しかも、ただ聞かえてきたのではない。「風に乗り」聞こえてきたのである。この表現によって動物たちの寂しさ、悲しみが一層強く伝わることとなった。

なお、「うたの地図」上では、この歌の上部に「尻こすり坂」との文字が、坂のイメージそのままに斜めに表記されている。「尻こすり坂」とは、実に印象的な名称だ。作者は、この坂の上から動物達の咆哮を聞いたのである。

テンペラ画の個展会場は高架下僅かに額の傾きて
をり 半澤敏子

詠まれた場所は「黄金町 高架下スタジオ」とのこと。黄金町の高架下は、近年再開発され、カフェやアトリエ、雑貨店といった様々なアート空間に生まれ変わった。この店舗は、アーティストがプロデュースし、ギャラリーとしてリニューアルされた模様である。高架の上を電車が通過し、その度毎に僅かに会場が揺れるのだろうか。「額の傾き」はその振動のため生じたのかも知れない。

「うたの地図」上に目を転ずれば、初句「テンペラ画の」という文字が、額の様子のイメージそのままに



馬車道十番館

傾いて表記されていることも見逃せない。再生されて人々が集う黄金町。そうした横浜の息吹を、新しいギャラリーの様子を通じて伝えている。

黄の車体光らせ夜のタクシーが連なっている伊勢佐木町の
嵯峨直樹

伊勢佐木町は、かつては横浜の中心的な繁華街としてのステータスを維持していた。時代は変わり、横浜駅西口、更にはみなどみらいへと商業の中心地は変遷してきている。伊勢佐木町の中心をなしていたデパートも数年前に廃業してしまつた。とは言え、酒類を提供する夜の店、社交場や店舗はまだまだ健在であり、そして営業中。

直接には詠まれていないが、歓楽街の中で歌い、遊ぶ人々の体温や息遣いをこの歌は背後から伝えている。

る。「黄の車体」のイメージがとても鮮烈。タクシーの連なっている様子を通じて、歓楽街の様子を具体的に描き出している。

横浜は東京よりもアメリカに近いと思いついて昭和に育つ
渋谷香代子

横浜は、物理的には東京に極めて近い都市でありながら文化は独特だ。幕末に開港して以来、様々な外国の文化を積極的に受け容れてきた。そこが政治の中心となつた東京とは違ふところだろう。真つ先に新しい文化を吸収する先進性と、異国情緒溢れる町の様子、たまたまいとスタイリッシュさで東京の文化とは趣を異にしている。

そして外国の中でもアメリカはまた格別だ。この歌の詠まれた石川町周辺には、アメリカ人の居住していた洋館もある。アメリカの文化を感じさせる店舗も多い。元町がそうだろう。近隣の大都市との文化の違い、アメリカを始めとする外国に近いということは誇りであり、この歌にはそうした思いが込められている。

山の手のあふち花咲く文学館ぼうず頭の子規にあひにゆく
川井怜子

二〇一七年に神奈川近代文学館で開催された「正岡子規展」を詠んだ作と受け取った。「子規にあひにゆく」ということであるから、作者は文学館まで足を運んだのだろう。「あふち花」は、万葉集にも詠まれた花。万葉集を再評価することを提唱した子規の思いと重ね合わせていると読みたいがどうか。そして、上句「あふち」と下句「ぼうず」とが韻を踏んでいることの面白さ。近似した言葉の響き。

「あふち花」の可憐さと、私達のイメージとして定着している「ぼうず」頭の子規のポートレート、その

両者が一つの空間、視覚の内に並列されている。子規に対する最大のリスペクト、賛辞かもしれない。

にんげんのやうなる声にからず鳴く日照り雨ふる
ふらんす山に
時本和子

「港の見える丘公園」で詠まれた歌。港を一望できる、広々としたスポットである。夕刻だろうか、人間が叫んでいるかのような声がある。からすが幾羽も空を舞い、鳴いている。日照り雨が降っている、安定しない天候の中での一幕。上句で聴覚、下句で視覚を働かせることにより一首が統一されており、場面が読者に伝わってくる。結句に至り、この歌の詠まれた場所がようやく明かされるといふ構成である。

少なからず不気味な雰囲気がかすむ作品であるが、一首のそうした空気を反映しているのだろう。「うたの地図」では、斜め右下がりに表記されたデザインがどこか怪しげな空気を醸し出している。

港の見える丘公園に咲きてみむバラの見頃をコロ
ナは奪ふ
柴原明美

港の見える公園内の「バラ園」は、多くの人たちの目を惹きつけるオアシスとなっている。今年もその季節が巡ってきた。作者も訪問することを楽しみにしていたのに違いない。しかし、残念ながらコロナ禍のため、開花の見頃のピークが過ぎた後での開園。しかたがないとはわかつてはいるものの、何ともやるせない気持ちがある。結句の「奪ふ」には落胆と悲しみが込められている。

「うたの地図」では、作品の主人公である「バラ」と「奪ふ」の文字が赤色で表記されている。とても強い色だ。作者の無念さが文字の色を通して読者にひしひしと伝わってくる。

ハマの魅力◎真鍋正男

横浜市に住むようになって四十五年になるが、市や区の歴史などには無知のまま過ごしてきた。今回のユニークな企画で大判地図を購入し市の歴史や区名の由来・変遷などを調べるようになった。人口五百人足らずの横浜村は、横浜港開港の安政七年（一八六〇年）横浜町と改称。新橋〜横浜間に鉄道が開通して人や物流が増え、明治十一年（一八七八年）横浜区ができ、明治二十二年（一八八九年）市制が施行されて横浜市となり人口は十万人を超えた。転機は大正十二年（一九二三年）の関東大震災。瓦礫の山からの復興は都市部の横浜市では速やかに進んだが、市の周辺の二町七村では進まず、横浜市への合併を要望。昭和二年（一九二七年）四月、横浜市は合併に合意し、同年十月に全市を五つに分割する区制を施行する事になった。鶴見区、神奈川区、中区、保土ヶ谷区、磯子区の五区である。その後、昭和十八年（一九四三年）中区が再編成され、南区が分離。更に昭和十九年（一九四四年）に中区が再編成され西区が分離している。

*中区

中区の名の由来は明快で、当時市内には一九四の町があったが、中区は一〇四の町から編成されていた。区役所の吏員も半数以上が中区に集中していた。本牧

埠頭等も中区にあり、機能的にも規模の点でも横浜市の中心になっていたのが中区だった。現在、横浜市には十八の区があるが、今回寄せられた作品合計八十首を区別にみると中区の作品は三十首あり、四割近い人が心に残る場所として中区の歌を詠んでいる。

ものを抱かかたちに羽をまるくして青鷺とまる泊
まり舟の舳 平賀富美子

青鷺は全長約九十三cmの大型の鷺で、背の側は青色を帯びた灰色。着地の際に見られる青鷺独特のフォームが簡潔、的確に表現されており注目した。「とまる」と「泊まり船」の音の重なりは避けたい。泊まり船は繋船かりぶねとも言い、舳の読みも幾つかあげられる。

陽を分けて寄りくる真鴨・軽鴨の真直ますぐな水脈みおを眩しみにけり 堀部知子

真つ直ぐな水脈をひきながら近寄ってくる真鴨と軽鴨の取り合わせが絶妙。鴨の多くは北国で繁殖し秋に日本の各地に渡ってくる冬鳥だが、真鴨は少数が北海道や戸隠などの高地で繁殖し秋に各地に渡ってくる。軽鴨は国内で繁殖する鴨で、都市部の公園等でも子連れの姿を見ることが出来る。軽鴨の雌雄はほぼ同色で嘴の先端は黄色、基部は黒褐色で頭と胸は淡い褐色。背と腹部は黒褐色で羽の縁の部分は淡い地味な鴨。真鴨の雌の嘴は黄色の地に広く黒色部が広がり、体色は

黄土色と黒褐色の斑模様ハダカの地味な色。雄の嘴は黄色でよく目立つ。頭部は緑色で光沢があり、陽光の角度によつて鮮やかな緑色から青紫に見え、胸は焦げ茶色で背と腹部は灰白色。首と胸の境には白いネックレスのような頸環模様がある。色彩の美しいおしゃれな雄なのだ。近年真鴨の国内繁殖が増え、軽鴨との交雑個体も増えていると聞く。陽光に眩しく光る水脈も象徴的で、新たな恋が芽生えるのかもしれない。

忘れ得ぬ 篠笛聴きしあの秋の角宮さんと澄みし
音色を 原 昌子

横浜歌人会の企画で開かれた篠笛の澄んだ音色は今も記憶に残る。三溪園の鶴翔閣は、原三溪の自宅で、横浜市指定有形文化財になっている。前田青邨や横山大観等の日本画家が集い滞在して絵を製作するなど、文化サロンの役割も果たし、和辻哲郎の名著『古寺巡礼』の旅もここから出発したと聞く。震災や戦災などで改変があったが平成十年から平成十二年にかけて修復工事が行われ、建築当初の姿に復元されたという。

角宮悦子さんは、横浜歌人会の副代表委員も務められ、世間知らずで無頓着な私などにも優しく声をかけて下さった。篠笛の澄んだ音色とともに角宮さんのおおらかで澄んだお人柄が偲おもばれる一首。

渋谷にて夫の遊びし内田さん家浜に移りて外交官
の家 中込力ヨ子

この一首に出会うまで、中区に山手イタリア山庭園という美しい公園があることを知らなかった。明治十三年（一八八〇年）から明治十九年（一八八六年）までイタリア領事館がおかれていたことから周辺の高台はイタリア山とよばれ、庭園には幾つかの欧州風の建物がある。「外交官の家」は外交官内田定植氏が明治四十三年（一九一〇年）渋谷の南平台に邸宅として建てた「とんがり帽子の屋根をもつアメリカ風の

館」で、内田定楳氏の孫にあたる宮入氏から平成九年（一九九七年）に横浜市は寄贈を受け、イタリア山庭園に移築復元し一般公開された。この館は国の重要文化財に指定されている。渋谷で夫の遊び相手だった内田さんは宮入氏と想像するが、大邸宅を市にポンと寄贈できる人は只者ではない。人と人とのご縁の不思議を改めて教えてくれる一首。

たのまれし寿司果物など買ひ持ちて元町の家通ひし数年
正古誠子

横浜市は児童福祉については先進的な都市で市民のボランティア活動も活発だ。親のいない子供たちから学ぶことも多かったのではないだろうか。作者の複雑な思いが込められた一首。場所を表す「孤児院」は、現在では児童養護施設として、「児童愛護院」等に名称が変更されているので注意したい。

開港のハイカラ菓子を伝へ来し「十番館」は海向きて建つ
中村泰子

「十番館」は若き日のほろ苦い思い出が詰まった場所であるが、お菓子に目が奪われて建物の向きなどに気づかない。着想がユニークで笑いを誘われる一首。

*港北区

昭和十四年（一九三九年）に新設された港北区は、都筑郡の幾つかの村が横浜市に編入されたことに伴い神奈川区の一部と合体して生まれた区であり、当初は現在の都筑区、緑区、青葉区を含んでいて、横浜市の三分の一を占めるほど大きな区だった。横浜市の「区の変遷」によれば、昭和四十四年（一九六九年）港北区が再編成され、緑区が新設され、平成六年（一九九四年）には港北区と緑区が再編成されて青葉区と都筑区が新設された。『港北区史』では「区名誕生のいきさつ」の項で「港都横浜の北部に位置することをもって

港北区とした」と簡潔に記されている。

就職の報告に來し孫息子高田の駅で握手交はしぬ
下田聰子

現代の孫と祖母との関わり合いを表す微笑ましい一首。「孫息子」は論議を呼ぶ言葉だろう。古い日本語では孫は男子の孫のみを表し、女子の孫は「孫娘」と表記していた。調査では六割の人が「孫息子」に「違和感を感じる」と答えている。現時点ではマスコミや辞書でも余り使われていない。女性総理の出現が待たれる昨今、一石を投じる言葉と思う。

慶應のイチョウの若葉のトンネルを抜けて広がる
宮下俊博

慶應大学日吉キャンパスの前の通りを歩いたことがあるが、中の様子は知らなかったので結句の理解に苦しんだ。ようやく昨年春に竣工した新・日吉記念館であることが分かった。地上四階・地下二階の大きな建物で、最大収容人数は約一万人。一階から四階には大きなステージが設けられ、別にバスケットのコート三面が入るアリーナや地下には射撃場まである。両隣に立つ校舎と調和するよう設計された記念館は四季に映える白を基調とし、正面に並び立つ柱の白が目を引き、まさに「ギリシャの白」。ネーミングもさすが慶應と感心した。日吉キャンパスの魅力を簡潔に表現した一首。太りゆく松が門柱を倒しそう大夕焼の下に生家は

植物の生命力、パワーの凄まじさを表した一首。大夕焼は夏の季語だが、この一語で情景が鮮やかに目に浮かび、作者の不安が切々と伝わってくる。生家を離れ住む読者の深い共感を呼ぶ一首と思う。

若き日には気にならざりし坂道を休憩とりつつ家路を歩む
中村規子

私も坂道の途中の家で暮らしているので、とてもよ

く分かる一首。横浜や横須賀は急な坂道が多く、今は電動自転車で難を逃れているが、時には登り切れない坂道と出会うこともある。「坂道を」「家路を」の「を」の重複は避けたい。「家路に向かう」でもよいのではないかと思う。

今回は市内十八区のうち、緑区と泉区の作品は見られなかったが、区名の由来や各区の歴史などを追いかけているうちに、緑区も泉区も自然ゆたかな魅力的な区であることを知った。緑区は昭和四十四年（一九六九年）、港北区から分区して誕生した区で、当時は青葉区全域と都筑区の位置を含む大きな区で区名は公募により最多票を獲得した緑区がそのまま採用された。その名のおり新治市民の森のほか、農地も多く「浜梨」「浜葡萄」などの果物のほか様々な作物が栽培されている。鴨居駅の近くには農業専用地区もあり、緑区は樹林や農地が占める割合を示す緑化率が横浜市内で最も高い区なのだ。ぜひ行って見たいと思う。泉区は昭和六十一年（一九八六年）戸塚区が再編成され新設された。昭和五〇年代から、戸塚区は爆発的に人口が増え四十二万人を超え、全国百十二の行政区のうち第一位。（全国の一区の平均人口は十五万人足らず）泉区は農業が盛んで農地面積は市内第一位。区内には泉川など川が四本も流れて親水拠点もよく整備されている。鎌倉道と大山道などの古道が交差する区であり、神社仏閣などの歴史的遺産も数多く残されている。「泉が湧き出るように若い力を生み出す」という願いを込めて「泉区」の区名が採用されたという。区内の半分以上が開発に制限のかかる市街化調整区域になっており「水と緑と歴史の散歩道」も整備され、富士山の絶景スポットもある。すぐにでも飛んでゆきたくなる区と思う。

海の横浜、山の横浜◎大橋 弘

東京以外に住んだことない私だが、父方の親戚二家族がそれぞれ金沢区（六浦）、保土ヶ谷区（仏向町）に住んでおり、年に数回は遊びに訪れていた。親戚といっても関係の濃淡は異なり、仏向町にはあまり行かず、もっぱら六浦に赴くことが多かった。京急の特急電車が京急川崎を出てしばらく、進行右手に鶴見の丘陵が迫り、その天辺に黒々と見知らぬ誰かの銅像が聳えていた。いかに天候が良い日でも、見上げる銅像はいつも暗く威圧的で、横浜は自分の住む東京の南の果て（大田区羽田）とは異なる天地なのだ、と思わされた。丘は怖かった。平地が良かった。さらにいえば、その大地の足元に打ち寄せる波、その波を漕いだ海が好きだった。もちろん、鶴見の丘にはとうに波は打ちつけもしないのだけれど。

長ずるに及んで、川崎から横浜に本拠地を変更したプロ野球の球団を愛するようになり、高校生ごろからは一転、桜木町から石川町の一带に足を運ぶようになる。今ほど小ぎれいではなかった港湾地区だ。近年は「近代遺産」なんて特別な名称を勝ち得ている土木建造物も健在だったわけだが、当時は暗く冷たくただそこにあった。人間も人間による造形物も、そして、港湾地区に絞込まれるようにはめ殺された海も、互に拒否的だったように感じられた。それは、思春期の自

分が人間として未成熟であったためかもしれない。

私にとって、横浜は海だった。もっと仏向町に分け入っていけば、あるいは横浜のもう一つの側面である、「山の横浜」に気づいていたはずだけれど、それには時間が必要だった。山の横浜を意識するようになるのは、就職して新幹線によく乗るようになってからだ。それはでも、新横浜駅でふと、こんもりとした篠原の小山を打ち眺めるときぐらいなもので、地べたに触れるというものではない。今回、会員諸氏の作品を拝読することで、いくらか「山の横浜」の呼吸を感じ取ることができたように思う。

睡蓮の白き花々清すがと咲きたる園に孫らと憩ふ

林 静峰

作品をみると、「花々」に「清すが」と同音を続けてリズムを作りつつ、表記を変えることで視覚的には変化が付けられている。「白き」に対して「清すが」に潜む「青」などの細かい仕掛けを読み込むこともできそうだ。都筑中央公園は自然の地形を生かした場所で、区画整理の結果誕生した公園のようである。新しい公園といっても、自然はある程度従前から引き継いでいるのだろう。

都筑郡石川村を蛇行する早刈川に揺らぐひかりは
桜井健司

川は流れ、そしてその水面に揺れる光は、現在の地名がいかなるものであろうと、在りし日の場所を同定するべき都筑郡石川村を、今も蛇行しながら流れているのである。とうかむしろ川の流れは、人間が捨てた、と思っているものを今も保ちながら蛇行している。蛇行するということに、人間が征服しきれない自然の姿が読み込める。人間が光だと思っていることも、実は揺らいでいるのかもしれない。早刈川は鶴見川水系。

朝けより囀りゐたる鶯の昼はいづこか城址の藪か

小林 勝

もとよりウグイスは藪のような場所で囀る性質である。朝あけ時分のウグイスは、さしずめ人里近くで鳴き誇っていたのであろうと想像する。一か所にじっとしているタイプの鳥ではないので、昼は人里から遠ざかって、城址の藪に攻め上ったということなのだろうけれども思うに、「昼はいづこか」という疑問は、「城址の藪」以外に鶯が立ち寄る場所が存在することを暗示している。「城址の藪」はウグイスにとっても、詠み手にとっても、選択肢の一つなのである。詠み手の近くで鳴いていたウグイスに対する、軽い問いかけの気分が強く出ているのだ。そういった心持ちの動きがなければ、「昼は城址の藪に鳴くらむ」といういささか静止画のような古今和歌集風の結句になっているのではないかと思われた。茅ヶ崎城は中世の平山城。海に対する山の歴史の深さ。

行き還る道の辺に咲く娑羅の花ゆるき歩みの夫と
見上ぐる
津波古勝子

「いきかえる」に「往還」の字を当てている。行きっぱなしではなく、帰ってくるということ。そこに娑羅双樹が配されているので、青葉台駅を中心にした行き帰りの歩みには、どことなく詠者と「夫」との人生の歩みが重ねられているように思う。沙羅の花は朝に開けば夕べには落ちる儂い一日花だが、それだけに二人の重ねてきた人生の経過がほの見えてくるようである。

太古のはるか風のなかなる麦の穂が光に立ちぬ

高橋みずほ

麦の稔りの時期はまさに光輝くころだから、後段の表現には特に驚くことはない。けれど前半の空足を踏んだようなリズムにはたじろぐ。「太古のはるか」という初句はすぐあとの「風」を形容する字句なのか、あるいはそれ単独で太古のはるけさを感じているのか、あまり判然としない。あるいはこういうことなのかもしれない。定型からあるべき言葉が抜け落ちたように見える高橋さんの作風は、人類が手掛けた最古の作物のひとつである麦を描くにあたって、その由来を太古に遡る呪文のような気配を短歌に齎している、と。

手を引かれ励まされつつ登り来し小机城址は紅葉のパノラマ

荒川とよ子

この歌には中世の城の持つ歴史性やある種の暗さのようなものが見当たらない。むしろ、試練のあとに開けるカタルシスとしての紅葉のパノラマだ。小机城址は鶴見川を見下ろす平山城で、遮るものない眺望を明示するこの歌でもわかるように、相応の高低差があるようである。

夕焼けはベイブリッジにも及びあてH型映ゆ あそこから海 三枝むつみ

H型、というのはケーブルの支柱にもなっている「塔」のことであろう。横浜の海に高く聳える塔であるが、旭区からみればベイブリッジは東側になるから、夕焼けはベイブリッジに照り付けていることになると思う。そのような光景を見たことがないので想像を及ぼせるほかないのであるが、「海の横浜」の存在感を際立たせる土木構造物が夕焼けに浸されるさまを見るのは壯観なのだろうと思われる。

石段を登りし先に秋居りてわれに見よとぞ寺の紅葉を

綿貫昭三

石段を登る途上に居なかつた秋が、「先」には居るということである。山号院号寺号というぐらいなので、往々にして寺は上り詰めた先にその威容を展開しているものだ。歌からは、寺院というより、紅葉する木々が控えているというふうにししか読めないのだけれど、一山すべて秋、という雰囲気を感じてはいる。また、「寺の紅葉を」見よと命じているのはあくまで秋である。寺というものは、その思想的背景はさておくとして、人為の営みである。紅葉は、言うまでもないが、自然の営みであるわけだが、それらをさらに越えた地点から命じる存在が秋だというわけなのだろうか。自然すらも越えた存在、という受け止め方があるのかどうかはともかくとして。

討たるも討つも歳月の向かうへと消せて万騎が原その名は残る

荻谷君代

万騎が原の「万騎」はもとは「牧」であつたと推測される。中世期の古戦場であり、一万騎が由来のひとつとされている。もっとも、現に万騎が原のある地点

に立ち、目前に「討たるる討つ」の合戦絵巻の像を結ぼうと努力しても、容易に果たせるわけではないだろう。この歌は、それにチャレンジしたのかも知れないが、フックとなる具体物を詠みこむことなく、固有名詞（地名）そのものを詠おうというのだから、内容が観念的、抽象的になるのもやむを得ない。というかむしろ、そのような試みを促すことこそ、この地名の持つひとつの力だといえるかもしれない。

「鎌倉を生きて出でけむ初松魚」蕉翁の夕餉の相伴をせむ

長崎厚子

富塚八幡宮には、そのホームページによれば、「戸塚」の地名の源と言われる「富塚」の石碑がある。また、幕末の嘉永年間には、芭蕉の句碑が建てられている。その句碑に刻まれているのが「鎌倉を生きて出でけむ初松魚」である。芭蕉は、（おそらくは江戸で）初鰹を前にして「鎌倉を生きたまま出たのだろうか」と推量しているのだが、それはとりもなおさず鰹が鮮度を保っていたということであろう。この歌は、それを踏まえて、鮮度のいい鰹をいただくにあたり、芭蕉の讃嘆にあやかるうというところか。もっとも、芭蕉の句をすべて引用して自作に取り込むのは、いただきすぎというものだろう。なお、富塚八幡宮のホームページでは、鎌倉を出荷した鰹は、同八幡宮のある戸塚を経由したそうである。

*第二二二号の訂正

十四ページの「新春歌会・懇親会報告」の河北笑子さんの文章中、「四首目の歌」とは、「金色に一山映えて静もれり二人分け入る櫛の林に」（藤田絹子さん）です。

最南端の旅◎大久保春乃

ここからは、「うたの地図」Yokohama」の南に位置する、戸塚区、栄区、金沢区をたどる旅である。三つの区を西から東へとめぐりながら、最南端の十首を味わってみたい。

不用意に雑草生える線路なり少しづつ人の戻る戸塚に
東戸塚駅から戸塚駅へと、「うたの地図」の線路は、ゆるやかなうねりを見せる。しかも「雑草生える線路なり」の部分は、いかにもみどりの地図面にはびこる雑草めいて、濃いみどり色である。

二〇二〇年の夏の初め、コロナはいったん収束に向かい、「少しづつ人の戻る」兆しを見せていた。それから一年後、再びの雑草の季節に、さらなる難局に直面していようとは、誰に想像できただろうか。初句の「不用意に」は「生える」に掛かるのだが、その後の世の中の成り行き、すべてに掛かる勢いをもって、先の見えない不安な時代を生きる読者の心に、重くのしかかってくる。

六月は思ふえこの木いくたびも仰ぎて亡き師が詠
みしかの花
大沢優子
毎年六月になると、作者はえこの木を思う。真っ白

なえこの花は、在りし日の師が詠まれた、なつかしい花である。ゆったりと詠い出された上の句から、師への思いの溢れんばかりの下の句へ。第二句の「えこの木」から、結句の「かの花」への展開が、読者の心に深く訴えかけてくる。

「亡き師」とはもちろん作者にとつての師であるが、読者はここに、自らの師の面影を重ね、それぞれの「かの花」を思い浮かべるのではないだろうか。誰の心にも師があり、師に導かれて今がある。「いくたびも仰ぐのは、亡き師であり、作者であり、そしてすべての読者でもあるだろう。」

大いたち小いたち橋のたもとなるシグナルレッド
の横浜桜
井澤幸恵

栄区のいたち川は、大いたち橋、小いたち橋のかかる、桜の名所である。「いたち」の由来は鎌倉時代、このあたりが鎌倉街道の出発点であったことから、出立の意味の「いでたつ」より転じたようだ。「うたの地図」では、「大いたち小いたち橋の」の文字が、二つの橋の欄干さながら、丁寧に、二度のカーブを見せられている。さらに地図上、そこから南へまっすぐに伸びるのが「横浜桜」。小いたち橋のたもとの銘木、横浜桜である。咲き盛る「横浜桜」の三文字は、鮮やか

な「シグナルレッド」であった。
心地よいリズムの生きた一首である。そんな歌と地図上のデザインが相まって、読者の心をなごませる、明るい情景が立ち上がった。

鎌倉の御代かうつつか行者道闍鎮まりて人をこば
まず
山下成代

舞台は栄区の定泉寺境内にある、田谷の洞窟。正式名称、田谷山瑜伽洞である。鎌倉時代に掘られた横穴洞窟で、真言密教の修行の場として名高い。筆者もかつて小さな蠟燭をともし、身をかがめて、恐る恐る入ったことがある。

洞窟の闇は八百年の時空を超え、「鎌倉の御代かうつつか」、ただしずかな鎮まりを見せつつ、そこに広がっている。「人をこばまず」とやさしく詠い収められたことで、鎌倉の修行僧の心と、令和の作者の心が、ひとすじにつながったようだ。

冬枯れの林のみちにダンディな蒿雀がひよいと姿
あらはず
中村節子

「冬枯れの林」は、横浜自然観察の森である。主役は「蒿雀^{あせじ}」。スズメほどの大きさのかわいらしい鳥で、冬になると住宅街の庭でも折々見かける。美しい黄緑色は、言われてみればなるほど「ダンディ」だ。リズムよく詠まれた愛唱性の高い一首は、一読、心に棲みついて離れない。

そして眼目は、なんといっても「ひよい」である。「うたの地図」を見れば、「ひ」「よ」「い」の三文字が、いかにもヒョイと飛び跳ねながら、楽しげに踊っているではないか。私たち読者はこの冬、どこかで蒿雀と出会うたびにこの歌を思い出し、思わず「ひよい」と、唱えてしまいたいようである。

称名寺の山門くぐればあきあかねわが背を越えて
池の水面へ

塚田キヌエ

北条実時の創建になる称名寺は、金沢区を代表する名刹である。「称名寺の山門くぐれば」という一、二句が、読者を浄土庭園へとしずかにいざなう。眼前には池が広がり、ふと気づけばわが背を越えて「あきあかね」が、水面へと飛んでゆくのであった。

「うたの地図」上、あきあかねが赤いかと思いきや、「池の水面」の文字が茜色であることに驚かされる。「池の水面」はひととき、あきあかねを映して、茜色に染まったのだ。古田もえ氏の解釈の、なんとポエジー豊かなことだろう。歌とデザインの交響によって、読者は、表現のさらなる深淵へと導かれてゆく。

水張る阿字池の鯉はうつすらと赤き影みせ動かさず



平潟湾

におり

千田政子

季節は移り、称名寺に冬が訪れた。かつて茜に染まった「阿字池」の水面は、時を経た今、氷におおわれている。氷の下の鯉は、「うつすらと赤き影」を見せつつ微動だにしない。静謐な冬の情景である。「うたの地図」上、「うつすらと赤き影みせ」の部分が、氷を隔てた、ほのかな赤で染められている。

金沢区の歌枕、称名寺は、二人の作者によって、それぞれ異なる季節の風景が、印象的に切り取られた。秋の「動」と、冬の「静」。この二首は地図上、やわらかな赤い糸で結ばれている。

金沢の漁の名残の船溜りをちこちに跳ぶ鯉を目に

追ふ

藤田絹子

金沢区並木のかつての漁港跡は、現在、富岡並木ふなだまり公園という、気持ちの良い親水公園になっている。休日には、水辺で釣り糸を垂れる太公望の姿も多い。……こうした情報が、「金沢の漁の名残の船溜り」という十七音をもって、見事に表現された。このゆつたりとした上の句からは、長い歴史の時間と、広大な船溜りの空気が、あますところなく伝わってくる。

そうした場所に立って、今、作者は元気に跳ねる鯉を眺めている。散歩の途上でもあるのだろうか。「目に追ふ」という動きが、いかにも楽しげだ。そしてこの楽しげな風情をさらに盛り立てているのが、「うたの地図」上の、「をちこちに跳ぶ」の文字の配置である。一文字一文字があらぬ方へと、まさしく飛び跳ねているのだ。作者とともに、鯉とともに、読者の心も弾まずにはいられない。

繫留用杭の頭に海鵜めて平潟湾にプレジャーボー

ト並む

土屋美代子

繫留用の杭といえば、上部が葺のようにふくらんだものや、陸に向かつてL字型に曲ったものなど、機能美の光るユニークな形が思い浮かぶ。その頭に海鵜がとまっているとは、いかにも港らしい景色である。海鵜はおそらく海の方を向き、作者はその黒い背中を見ているのだろう。海鵜と作者の視線の先には、幅一キロメートルほどの入り江である平潟湾が広がり、そこにプレジャーボートが並んでいる。

上の句から下の句へ、手前の海鵜から平潟湾へと、視界は気持ちよく開けてゆく。海と空の青、海鵜の黒、プレジャーボートの白。鮮やかなコントラストがまぶしいようだ。

「うたの地図」の南の三区を西から東へめぐる旅も、最後の二首に至って、いよいよ海へ出たのである。

潮の香の甘き十六夜ぬけだして帰帆橋への試歩を

ふみだす

稲垣紘一

平潟湾の野島へ渡る、三本の橋の一つである「帰帆橋」。この美しい名称の由来は、金沢八景の乙艦帰帆であるという。

しほのかのあまきいざよひぬけだして……上の句のたおやかな調べが、不思議の世界へと読者をいざなう。「十六夜」は月夜であると同時に、ためらいであり、たゆたいであることを思えば、それに続く「ぬけだして」とは、いずこからいずこへぬけだして行くと言っている。

下の句では、「試歩」をふみだす先が「帰帆橋」であることに、胸を衝かれる。人は皆ひとよをかけて、自らの場所へと帰ってゆくのかもしれない。「うたの地図」上、「帰帆橋」の三文字が、月光にほのかに照らされている。

楽しい旅◎山本登志枝

真昼間のアスファルトの上の吾が影は小さく屈まりひよろひよろ歩く 後藤恵市

作者の住んでいる金沢区釜利谷西の家の近くの、アスファルトの舗道に落ちている影のことなのだろうか。コンビニなどへのちよつとした買い物か、散歩の途次なのかもしれない。わが町のある日の「吾が影」が小さく屈まって見えたのは、真昼間という太陽の高い時間のためというだけではない気がする。下旬の「小さく屈まりひよろひよろ歩く」は実際の影の描写であり、また作者のどこか自らの今を見つめるゆえの、心の影が反映されてもいるようだ。

日常のなかに捉えた現実の影のなかに作者の今の姿を見ているのであろう。自嘲と寂しさ、気弱さも感じられる。そんな作者の心を思つてか「うたの地図」の表記も揺れながら曲がっている。

山の端の空の茜色澄みわたる虚空にグラデイション 松本嘉猷

作者は前作の作者に近い釜利谷東に住んでいる。自宅の窓や、ヴェランダか、近所の丘などからの眺めなのだろう。遠くの山の端の空が沈んでゆく太陽に茜色に染まっているのを見て、その澄みとおつた色にまず心を奪われた。「うたの地図」では「茜色」の字のみ、

赤くなつていて作者の感動を伝える。

やがて山の端の空から目を離し見上げると、黄昏れてゆく虚空は色のグラデイションが美しい。きつと浮かんでいる雲もいろいろな色だったのだろう。茜色、青、ピンク、薄墨、白などの色が思われた。二句は「山の端の空」であるが、四句は「虚空」と表記してあり、スケールを感じさせてくれている。

刻々と変わつてゆく夕空を「飽かで」見上げている姿に、一日の終わつてゆくときの作者の充実感や、黄昏という時間の豊かさが思われた。

小さき橋の欄干の石に刻まれし「大橋」の由来を 探れり今日も 真鍋正男

港南区笹下のどこかの橋らしい。鳥の好きな作者がいつも通っている鳥を見る穴場があるのだろうか。あるいは何かのため通っている途次にある橋で、いつも通りかかるたびに気になつてしまう橋らしい。川も小さな町川か、小川なのだろう。

作者の横浜の七不思議のひとつなのかもしれない。「小さき橋」なのに石に由緒ありげに「大橋」と刻まれていることが不思議でたまらない作者はいろいろ考へる。地形のことや、歴史などの由来を考えたり、調べたりしているのだろう。それでも分からず、ますま

す気になつてしまうようだ。「うたの地図」にきちつと三行書きに記されているこの歌より、「大橋」と刻まれた字を真剣に見ている作者の姿も伝わる。

何気ない町の片隅にも人の生きて来た歴史がひっそり残っていること、そうしたことにこだわりを持つ作者のことも思われた。

ドーン・パリパリッ・濃紺の空を裂く火花夜の窓々 に子らの歓声 鈴木和子

野庭町と註がある一首。野庭町は港南区にあり、丁目がない単独の町名であるということを知った。

野庭町の町内の花火大会なのだろうか。作者は外にでてか、あるいは自宅の窓から火花を楽しんでる。「火花を「火花」と表現し、飛び散る火としての印象が強かったことを思わせる。「ドーン・パリパリッ」というオノマトペが火花の上がってゆく様子や音の響きも伝える。火薬の匂いもしていたかもしれない。

「うたの地図」には「ドーン・パリパリッ」が火花の散つてゆく光を思わせる白い字で記され、あとは紺色の字で記されている。

火花が上がるたびに歓声をあげる、家々の窓に寄り見物している子供たちの無邪気な様子を見て、作者の気分もより高鳴つたことだろう。子供たちも街の人々の心もみな、明るく弾んだ夏の一夜だったことが伝わってくる。

晩夏の疎林を抜けて見下せり夕光に照る「みなと みらい」を 河北笑子

港南区の日野公園墓地で的一首。たくさんの樹々が墓域を取り囲んでいる墓地で、高台からは横浜市街が一望出来、ランドマークタワーや富士山も眺望できるところだそう。作者は近くに住んでいるようなの

で、お墓参りではなく散歩しているのかもしれない。樹々の茂りもどこかくすんでいて晩夏を思わせる疎林を抜けたところに、街並みや遠くへみなどみらいの景が広がっている様子が伝わってくる。

「うたの地図」には水平線、地平線を思わせるように、二行書きに、ゆったりしたカーブで表記され、景の広やかさを語っている。〈夕光に照る〉という四句が、晩夏の雰囲気をもよおしている。

江戸びとのところとなりて椿茂るへ黒船見物の丘に立つ 池谷しげみ

上大岡の真光寺の高台にへ黒船見物の丘があることをこの一首により知った。黒船の噂に見物の人がいだいにふえ、人々もいつか行楽気分で見にくるようになり、おだんごやお茶を売る人も現れ賑わったところだ。〈江戸びとのところ〉ははじめて異国の存在を知った庶民の恐れや好奇心などを思わせる。

椿の茂る丘に立ち、いまはもう浦賀沖まで見えなくとも、遠い時代のことをさまざまに思ったのだろう。〈江戸びとのところ〉とともに、その後の横浜の辿つて来た歴史なども思っていたのかもしれない。前作もそうであるが、横浜の坂多い地形も思わせる。みなとみらいや、ベイブリッジが一望できる夜景がきれいな所だという。

久良岐能舞台の庭の高みのあづまやに野点せりけり 落葉の頃を 高橋庚子

落葉のころ野点したのは、若いころだったのだろうか。かつては華道や茶道を習う若い人が多かったことなど思われた。〈久良岐能舞台〉という固有名詞と、〈落葉の頃〉という季節が、遠い日を懐かしむ思いをよりふかめている。

久良岐能舞台はかつて、日比谷にあったものが、横

浜市に寄贈され、移築したもので、百年以上の伝統と格式のある舞台という。名前だけは知っていたが、まだ行ったことはない。能舞台、茶室の貸し出しをしていて、癒しの庭園として知られるパワースポットであるということだ。〈庭の高みのあづまや〉がゆったりと起伏のある庭園の様子を想像させる。落葉の降る、歴史ある所で野点をした日は作者の心の原点のような日なのかもしれない。

横浜市磯子滝頭蒼天の五月まぶしく囀りやまず 福島泰樹

一読して、磯子滝頭というところは、「うたの地図」にブルーで表記されている〈蒼天の五月まぶしく〉や、青空ではなく〈蒼天〉という言葉から、また心の奥にある琴線にふれるような一首の響きから。作者にとつての青春を思わせてやまない所なのだと思つたが、「囀り」という言葉から浮かんでくるひばりから、思いついて調べてみて、〈滝頭〉は美空ひばりの生まれの所であったことを知った。〈五月〉はひばりの誕生日五月二十九日の五月でもあるのだろう。そのことに気づき、この歌の響きや調べがより現実的で、血の通うものになったような気がする。

滝頭は美空ひばりのファンにとつては聖地であるという。また美空ひばりのお墓は55番に歌われたみなどみらいが遠く見える、日野公園墓地にあるそうだ。

夕照の大岡川を 一列に母子家族らし軽鴨長閑

永平 緑

夕暮れの大岡川に泳いでいる一列の軽鴨の親子、よくみると大きな親の鴨は一羽だけで、どうやら母子家族らしい。〈母子家族らし〉という発見が、軽鴨の親子に向ける作者の暖かいまなざしを伝える。

桜の名所として知られる大岡川は磯子区水取沢町に源を発し、横浜市を流れ横浜港へ注ぐ二級河川、まさに横浜の河だ。

「うたの地図」には〈を〉と〈軽鴨〉だけ白で、あとは、水の流れや、あたりを染めている夕焼けを思わせる赤い色で表記されている。〈夕照〉という初句、〈軽鴨長閑〉の結句が効いていて、夕暮れのやさしさ、静けさが伝わってくるようだ。

箱根駅伝戸塚に向ふ権太坂歓声の中走る若人 長谷川静枝

箱根駅伝の戸塚中継所への難所で知られている〈権太坂〉の沿道に立つて、作者は歓声をあげる一人となつて応援しているのだろう。つぎつぎと過ぎてゆく走者のまぶしい若さ、力強く走る様子が見えてくる。「うたの地図」は傾斜を付けた二行に、一字一字も傾けて表記していて、険しい坂道の様子を伝えている。

権太坂の名前の由来は、鎌田権左衛門という開発者の名からとつたという説と、旅人に坂の名を問われた耳の遠い老人が、自分の名を聞かれたと思ひ権太と答えたところからくるという説があるという。

歴史ある〈権太坂〉走ってゆく力強い姿に感動し、励まされながら、作者は〈若人〉たちの未来も応援しているのだろう。

51から60まで作品の横浜は行ったことのある所より、名前だけ知っている所や、はじめて知ったところの方が多かった。四十年以上横浜に住んでいながら横浜のこと何も知らないことに気が付きました。あらためて、横浜の良さや、奥深さが思われ、歴史に思いをはせることもできました。歩いてみたい所も出でて、楽しい旅をしたと思います。

うたに「よいはま」の風景が、ある◎ 荻谷君代

現在の「横浜市」に当たるのは、かつての、武蔵国久良岐郡と、橋樹郡・都筑郡・相模国鎌倉郡の一部です。みなそれぞれに魅力ある長い歴史を持っています。

そして開港以後の横浜は、森林太郎（鷗外）の市歌にあるように、めざましい発展を遂げてきました。

古田もえさんの、心が吸い込まれてゆくような、ふかい緑の色の地図は、はからずもこの、人々が長い時間をかけて大切にしてきたものと、新しいものとを、融合している、そのゆたかな象徴のようにも思えます。

作者の方々の思いに寄り添いながら、語りかけるように、この文章を書くことが出来ればと願っています。

評文の冒頭の部分に「へ」をしてあるのが、その作品が詠まれた場所です。作品は、61〜70の順に、並べさせていただきました。

雲ひくき空より明るく花咲きて大岡川のほとり賑はぶ
渡辺 謙

〈大岡川岸辺〉（南区、弘明寺）の、桜の花は有名です。大岡川のほとりの、花見の賑わいの中に、渡辺さんもいます。雲は低く、うす曇りの空ですが、桜の花は明るく咲いています。その対照が美しく、花は、人々の心が灯っているかのようにも、思えます。

う切実な思いを持って、私たちに迫ってきます。

MMにトロイの木馬のやうなビルあとからあと
尾崎知子
から人が出て来る

このビルは〈ランドマークタワー〉（西区 桜木町）です。現代の象徴である「MM」のランドマークタワーと、ホメロスの詩「イリアス」が語る、古代ギリシアの戦争に出てくる「トロイの木馬」。

尾崎さんは、対照的な、この二つのものを、見事に一首に詠み込んでいます。

油断していたトロイの人々を、大きな木馬の中に隠れていたギリシアの兵士たちは、次々と襲って、長かった戦争に勝利しました。

タワーから出て来る、たくさんの人々は、これから何処へ行き、何を成そうとしているのでしょうか。

この歌を読んで、ランドマークタワーが、トロイの木馬に見えてきたから、不思議です。

道の辺のさりげなく咲く露草の紫こぼし細き雨ふる
葉山昌子

〈仲尾台〉（中区）は、JR山手駅の近くにある、住宅街です。この仲尾台の道を、ずっと歩いて行くと、根岸森林公園があります。また、山手の洋館や「港の見える丘公園」まで、散歩の足をのばすのも、楽しいと聞きました。

ここは葉山さんの、普段からよく歩かれる道なのでしよう。「さりげなく」咲いている露草ですが、その花の紫の色には、はっと胸を打たれるものがあります。

青ではなく「紫」とあります。葉山さんの好きな色なのでしようか。その紫の色をこぼしつつ、雨が細く降っているというのです。

何となく、なつかしいような、露草の花に語りかけ

たくなるような、そんな気持ちになります。

一瞬 Violet のそら現われ消えたり 轟音、走る
海まで 吉野裕之

〈根岸〉(中区)で詠まれたこの作品を、言葉をもつて鑑賞することは、難しいのかもしれませんが。抽象的、感覚的で、奔放自在な歌いぶり、それが魅力のこの作品は、読む人にさまざまイメージを抱かせます。

これは日常に見る、一瞬の空の表情? けれども私
がまず思ったのは、根岸の空爆の写真だったのです。

一九四五年五月二十九日の早朝、爆撃機が横浜中心部を襲いました。横浜大空襲です。根岸も例外ではありませんでした。そして、埋め立てられる前の根岸の海は、今よりも、もつと近くにあったのです。

こうした事実をふまえて、この一首を読むとき、私には何となく得心がゆくのです。吉野さんはこの解釈に、きつと微笑しておられるに違いありません。

満月の浮かぶ港を散歩せし君旅立ちて五十三年

田之口久司

田之口さんには、今も大切にしている思い出があります。それは〈山下公園〉(中区)と一緒に散歩した「君」のことです。満月がぼつかりと浮かんでいる、港。潮風に吹かれて二人歩いた、若かったあの日。

その「君」が旅立つてから、五十三年が経つというのです。港を背景としての「旅立ち」ならば、「君」はどこか遠くの場合へ行つたのかもしれませんが。けれどもこの「旅立ち」には、もう一つの意味があることに、私たち読者は気がつくのです。

田之口さんが「君」と歩いた、山下公園。そこには関東大震災のときの瓦礫(…)と言ってしまうと胸が痛みます)が、埋められています。深い鎮魂の祈りは、

これからもずっと続いてゆくのです。

欄干にカモメ並びて冬陽浴ぶ土曜の午後
の大きさ 橋の 鶴見典子

カモメは自在に空を飛びます。けれども今日、土曜日の午後は、カモメたちが〈大さん橋〉(中区)の欄干に並んで、穏やかな冬の陽を浴びながら、ゆつくりと羽根を休めています。

土曜日、鶴見さんも、一週間の疲れを癒すために、この大さん橋に来ているのかもしれませんが。

大さん橋は、船が接岸できる港として、明治二十七年に完成しました。(それまでは「象の鼻」が使われていました。)大さん橋からは、昔も今も、たくさんの、客船が出入りしてきたのです。

カモメがまた大空へ飛んで行くように、鶴見さんもここで活力を得て、あらたなる明日を、迎えられることでしょう。

開港百六十年の埠頭には「横浜鈍宅之図」のラッパは鳴らず 佐波洋子

開港百六十年を迎える〈大さん橋埠頭、横浜港〉(中区)に来て、佐波さんが思うのは、「横浜鈍宅之図」

の、ラッパのことです。この錦絵は一八六一年に描かれました。「鈍宅」とはオランダ語の「ソントタック」が訛つたもので、日曜日のこと。休日を楽しむ居留地の外国人の様子が描かれています。仏、露、米、英、蘭の人々の先頭に、ラッパを吹いている人がいるのです。

「ラッパは鳴らず」の表現が、かえって読者にラッパの鳴り響く、その音を意識させます。あの藤原定家の「見渡せば花ももみぢもなかりけり」が、逆に、花や紅葉を、私たちに強く意識させるように…。

今と昔が交錯している、ロマンあふれる作品です。

海を見る ただそれのみに来し埠頭ひと日の余白
を船とほく航く 結城千賀子

海を見る、と言い切つた表現が、とても潔く感じられました。そして下の句の、「ほうっ」と息をしたくなるような、不思議な安らぎへと続いてゆくのです。

結城さんが訪れた、ここ〈新港埠頭〉(中区)は、赤レンガ倉庫のある所です。明治三十二年に着工、大正六年に完成しました。

「余白」のような時間の中で、船影を追っていると、風景の中に引き込まれてゆくような眩暈を感じます。

船が「とほく航く」その先は、未知なる憧れの世界でしょうか、それとも、なつかしい傭船の世界でしょうか。結城さんが見ていた船は、いつとき、現実を忘れさせてくれるものであったのかもしれませんが。

うみの霧流るる夜は年寄るもみなとみらいを口笛でゆく 大久保晴雄

大久保さんは〈みなとみらい〉(西区)を、かろやかに口笛を吹きながら、歩いています。夜の海に、静かに霧が流れます。

想像すると、まるで映画のワンシーンをしているような感じがします。以前はJR桜木町駅のホームから、海を見ることが出来ました。穏やかな青い海でした。そして、駅と海のあいだには、視界を遮るものは、何もなかったのです。「ここに、すごい街が出来るんだって」と、人々が話をしていました。それは今、現実の事となりました。

「みなとみらい」は夢のような街です。口笛には、若き日を懐かしみつつも、充実した「今」を生きている大久保さんの思いが、込められているようです。

地図というアンソロジー◎吉野裕之

アンソロジー。私がこのことばを知ったのは、高校生だった一九七八年。おっ、と思った人は、熱心なさだまさしのファンかもしれない。さだの三枚目のソロアルバムが発売されたのがこの年。そのタイトルが「私花集(アンソロジー)」だった。代表作のひとつにあげられる「案山子」や山口百恵が歌った「秋桜(コスモス)」などを収めたアルバムといえば、ファンではない人にも、ああ、といつてもらえるだろうか。

英語なら *anthology*、仏語なら *anthologie*。そして、日本語では詞華集。その表記を、さだは私花集と置き換えた。おそらくそれは、単に技術にかかわることではなく、意志にかかわることだろう。高校生の私は、そんな理屈っぽい理解をしたわけではないが、ことばをめぐる大切ななにかを受け取ったのだと思う。

アンソロジーの語源は、古代ギリシア語の *anthologia* (花を集めること) だそう。紀元前一世紀に、メレアグロスが編集した詩人五十人のエピグラム(短い風刺詩)が最初のアンソロジーらしい。日本には、『万葉集』や『古今和歌集』など、多くのアンソロジーがある。

横浜歌人会でも、『横浜の歌人たち』や『横浜歌枕集成』など、周年記念の事業としてアンソロジーを刊行してきた。いずれも、貴重な財産だ。一九六九年(昭

和四四年) 四月に設立された横浜歌人会は、多くの会員に支えられてきた(私はいまでも下から数えたほうが早いので、多くの先輩といふべきか)。その会員の方々の作品をまとめて読めるのは、とてもありがたいことだ。

昨年は、思いもよらず、総会および新春歌会以外の行事を中止せざるをえなかった。そうした状況のなか企画されたのが、「うたの地図 Yokohama」だった。前号の後記に詳しいが、「歌で横浜の地図を描く、横浜の街並みを歩く」というテーマで作品を募り、八十人の会員から作品が寄せられた。運営委員を中心にするアイデアを出しながら進めたのだが、ほんとうにすばらしい地図ができた。そう、地図というアンソロジーができたのだ。いうまでもなく、デザイナー・古田もえさんとの出会いは大きい。古田さんはお若いけれど、だからこそ私たちの作品に、シャープでチャーミングな形と色を与えてくださった。短歌は、人と人を、何かと何かをつなぐ力を持っている。あらためて、そのことを実感した。アンソロジーは素敵だ。

人類を含めて地球は絶滅期カモメよ汝もこころし
て翔べ

横浜港の上を飛んでいる文字列の形は、カモメのそ

れであるとともに、曲線はねじれとも見え、一首の主題を可視化したものでもあるのかもしれない。地球にはこれまで五回の大量絶滅期があり、現在、第六の絶滅期が迫っているとの警告がある。「人類も含めて」。しかし目の前には、カモメが優雅に飛んでいる。カモメは自分に厳しく語りかけながら、絶滅は避けられないのだろうか、いや避けられるのではないか、と思いはめぐっている。

豪華客船たちまち感染拡がればわくらばのごと埠頭へらに浮かぶ
高尾文字

新型コロナがそれほど身近に感じられていなかったころ、集団感染がクルーズ船で起きた。三千数百人の乗客乗員のうち約七百人が感染し、亡くなった方もいた。クルーズ船は、大黒埠頭に停泊していた。「たちまち感染拡がれば」。横浜のまちに感染が拡がるのではないか。多くの人がそう思ったのではなかったか。「わくらばのごと」。ひらがなに、不気味なリアリティがある。横書きの二行の緩やかな曲線の文字列は、クルーズ船の比喩だろうか。外からは穏やかに見えるのだ。

わたつみのかなたに湧ける白雲に入りてゆけり一
つ汽船は
山本登志枝

わたつみとは、海の神。転じて、海や海原そのものを指す。「わた」は海の古語、「つ」は「の」、「み」は神霊、つまり海の神霊。美しいことばだ。「わたつみのかなたに」のひらがなの連続。それは海の穏やかさだろう。ひらがなはゆつくりと意味を伝える。「湧ける白雲」「一つ汽船は」。それに対してこれらの漢字は、風景をくつきりと印象づける。横浜港の沖に置かれた緩やかな曲線の文字列は、すつくり立って、大

きななにかを読者に届けてくれる。

ひとすぢの光のやうな遊歩道かつては運河にあり
し一筋 森 藍火

文字列は三行。真ん中の行に置かれているのは「遊歩道」の三文字だけで、スキップしたくなるような曲線とポップな黄色だ。運河は、人がつくった水路。自然のものではない。なにかの理由でつくられた運河が、その理由がなくなつて遊歩道になつた。理由や理由がなくなつた経緯は書かれていない。おそらく単純なものではないだろう。しかし、「いま・ここ」にあるのは「光のやうな遊歩道」。「ひとすぢ」と「一筋」の対比が巧みだ。

總持寺の伽藍の闇へ若き僧桜ひとかかえ持ちて入りたる 佐久間裕子

總持寺は永平寺とともに曹洞宗の大本山。文字列は上句と下句で二行に分かれ、初句・二句は黒、三句が白、四句が赤、結句が白となつている。いずれも、確かに一首を支えている。伽藍とは、空間的存在であると同時に、時間的存在でもあるのだと思う。その伽藍の闇へ、若き僧が桜をひとかかえ持ちて入つていった。桜は来年も咲く。若き僧は、来年も桜をかかえ伽藍の闇に入つていくのだろうか。そして、再来年も。過去と現在と未来が、一首のなかで繋がつている。

同じ「時」再び過ぐすことはなくふり返るため鳥居をくぐる 武田素晴

文字列は白、上句と下句で二行に分かれ、「ふり返るため」の六文字は時計回りに四十五度回転している。「同じ「時」再び過ぐすことはなく」。それは当たり前前のこと。当たり前前のことをこぼにすると、し

かし当たり前前ではないのだ。鉤括弧でくくられた時とはなにか。自分ひとりのことか、親しい誰かのことか、もつと多くの人がかわることか。穏やかな、あるいはひりひりした過去のことをふり返るために、向こうへいく。抽象と具象のバランスが魅力だと思う。

飲みながら妻がくるのを待つてゐる横浜白樂焼肉
「佐藤」 田村 元

初句・二句・三句は最初の文字だけ漢字、四句・結句はすべてが漢字（二文字ずつのセット）。そして、旧かなの「ぬ」がいい。文字列の色は「焼肉「佐藤」が桃色、ほかは白。それもいい。ところで、このお店はほんとうにあるのか。もちろん、ある。だから、いい。固有名詞の、こんな感じがとてもいいと思う。妻と夕食をとるためにお店で待ち合わせ。すこし飲みながら妻を待つている。なんでもないような日常のこと。だからこそ、短歌の韻律と親しいのだ。

横浜の「ラーメン博物館」は楽しかりふるさとの話にふるさとの味 竹内芳恵

文字列と地図上の場所を示す小さな丸とを結ぶのは、波線。ほのぼのとする。ラーメンテーマパークは、全国にいくつかあるようだ。横浜にあるのは新横浜ラーメン博物館。一九九四年のオープンだから、三十年近い歴史がある。「全国各地のラーメンを飛行機に乗らずに食べに行ける」がコンセプトのラー博は、確かに「ふるさとの話にふるさとの味」を楽しむことができる場所だ。初句「横浜の」は、ほかのラーメンテーマパークとの比較ではなく、横浜への思いであろう。

この空も大倉山記念館もわが町といとし五十年住む 関口満津子

文字列は上句と下句で二行に分かれ、ともに緩やかなカーブを描く。大倉山記念館だけが桃色。水色の地に、ゆつたりと置かれている。大倉山記念館は、実業家で東洋大学学長を務めた大倉邦彦によって「大倉精神文化研究所」の本館として建てられた。現在は、音楽会や美術展などに利用されている。「この空も大倉山記念館もわが町といとし」。前者（空）は大きさのこと、後者（大倉山記念館）は深さのことだろうか。つまり、「わが町」への敬意である。

ももいろの月がでていきりぎしとみわけのつかぬ駅をさがして 大橋 弘

駅は京浜急行神奈川駅。普通だけが止まる、小さな駅だ。文字列と地図上の場所を示す小さな丸とを結ぶ線は約二十八センチ。地図全体がA2サイズだからかなり長い。文字列は円に組まれている。確かに月だ。「月がでていける」。連体形と終止形の区別は難しい。前者であれば、月は出ていない。後者であれば、月は出ている。どちらもありうるし、どちらでもあるのかもしれない。「月」と「駅」以外はすべてひらがな。意味は、常に流動しているのだろう。

横浜では、矢指谷遺跡（旭区）や北川貝塚（都筑区）など、二十ヶ所以上の後期旧石器時代の遺跡が発見されている。二万二〇〇〇年以上前から、横浜には人の暮らしがあり、そして今も、間違いなく人の暮らしがある。「うたの地図 Yokohama」には、そんな人の暮らしの豊かさが広がっている。大切にしたい、そんな地図Ⅱアンソロジーだ。

*デザインされ、形と色をもった作品を「文字列」と表記した。色は白が基本である。

編集 後記

今年も行事を開催することができず、会報のみのお届けとなります。

前号の、みなさまとともに作り上げた「うたの地図 Yokohama」がとても好評でしたので、本号は二つのテーマで組むことにいたしました。

言葉、そしてデザインについて、ご執筆をいただけた方を運営委員会で話し合い、装訂家、俳人でもある間村俊一さんをお願いすることになりました。句集や歌集のほか、様々な分野の方々のご本の装訂もなっております。また装訂

に関する著書、句集も刊行されておられます。ご執筆をお願いしたところ、「山猫軒」でお話をお聞きしながら、お仕事を拝見させていただくこととなりました。なるべく、みなさまにもその場の雰囲気を感じていただけるように組みましたので、装訂のお仕事とともに味わいのあるお人柄に触れていただけたと思います。新作の俳句もいただきましたので、お楽しみください。

また、会員による作品評を是非組もうということになり、会員の方々のなかから幅広く執筆をお願いしま

した。それぞれの視点の置き方とともに、改めてデザイナー古田もえさんの一首ごとに込めてくださったデザインを読み取ることができます。言葉の力、言葉を読み取る力、デザインの発する力の三拍子の響きに耳を傾けていただければと思います。

今後不安定な状況が続くようですが、言葉で人の心に潤いが生まれるように、みなさまと力を合わせて横浜から発信し続けてゆけるよう、運営委員一同、よい企画を立ててゆきたいと思っております。

*

訃報が届きました。会の行事にいつも温かな笑顔でご参加くださった田代弥生さん、澁刺としてまわりを元気にしてください。佐久間裕子さん、副代表委員として会を支えてくださった真鍋正男さんがご逝去されました。真鍋さんには作品評をご執筆いただいております。最終調整をお願いできず、原稿をそのまま載せることとなりました。

ご冥福を心よりお祈り申し上げます。
〔M・T〕

横浜歌人会会報第一二二号

発行日 二〇二一年十二月二十四日

編集人 高橋みずほ

発行人 桜井 健司

発行所 横浜歌人会

URL <http://yokohama-kk.art.coccan.jp/>

制作 アトリエ云

印刷 啓文社

このファイルはホームページ配布版のため、奥付の内容が印刷版のものとは異なります。